

視点2

子どもが「安心」につながる

三浦未希

(幼稚園教諭)

当たり前のように使う「安心」という言葉。改めて意味を考えてみたことがなかったなと思ひ、辞書を引いてみました。

「安心『気にかかることがなく心が落ち着いていること。また、そのさま。』」

似ている言葉に「安全」がありますが、「安全」がどちらかというと身体的なことを指すのに対し、「安心」は字の通り、心の状態を指しています。幼稚園で子どもたちと過ごしていると、身体的な安全が守られていることはもちろんですが、子どもの心が健やかでいられることの大切さを日々感じます。子どもたちの心が、不安や心配ではなく、楽しみなこ

とやうれしいことで満たされ、安心して今を生きているとき、その生き生きとした表情や真剣に遊び込む姿、輝く笑顔からは、子どもたちが自ら育つていこうとする力強さを感じます。

私は、幼稚園に勤務して五年目の保育者です。これまで、「安心」ということは、大事ではあるけれど、どこか当たり前のことと思っていて、深く考えたことがありませんでした。そこで今回、「安心」について、私がこれまでかかわった子どもたちとのエピソードの中から改めて考えてみたいと思います。

年中からの新入園児のAちゃんは、入園当初から緊張感が高く、幼稚園に来ると立ちすくんでしまい、まったく動けずになりました。当時私は隣のクラスの担任をしていたので、担任の先生が、自分からは動けずにいるAちゃんの手を優しく引いて一緒に過ごしている様子や、不安げなAちゃんのことを心配しながらも、Aちゃんの前ではそのようなそぶりを見せず、いつも穏やかな笑顔で一緒にいる様子をよく見かけていました。そして、Aちゃんが自分の意思を少しずつ表現できるようになったこと、安心できる友達との間では笑顔で過ごす時間が増えてきたことなどを見たり聞いたりし、Aちゃんが少しずつ自分から変わっていく様子を頼もしく思っていました。

年長からAちゃんの担任になった私は、進級当初、新しい友達や環境に戸惑い、やはり動けなくなってしまうAちゃんの傍らにいて、心配な気持ちもありましたが、ある時、

「Aちゃんは自分から動きだすときを待っているのだな」と感じるようになりました。進級して間もないある日、Aちゃんは、朝、登園すると、着替えることもなくロッカーの前で立ちすくんでいました。私が、着替えるのが気持ちは変わるかなと思い、「Aちゃん、着替え、手伝おうか？」と声を掛けながら近寄ると、Aちゃんは、立ち尽くしながら、目はしつかりと年中組の時に仲良しだった子がしていることを追い、近くで友達が笑いながら話していることをこっそり聞きながら、時折顔をほころばせているのでした。私はそれを見て、Aちゃんはまだ体は動きだしていないけれども、心や気持ちは動いていること、もう少しすると、自然と体も動きだしていくのではないかということを感じ、昨年のAちゃんや担任の保育者の姿を思い出しながら、私もAちゃんが自ら動きだすのを見守りながら待つことにしました。その後、周囲をじっ

くり見ながら新しいクラスを自分で受け入れていったAちゃん。いつの間にか、心だけでなく、体も自ら動きだし、仲の良い友達と一緒にに園中を駆け回るようになっていました。

私は、Aちゃんとのかわりを通して、子どもたちが新しい場所に慣れ、自分から動きだせるようになっていく過程や、それまでにかかる時間は一人ひとり違うこと、傍らにいる保育者が、子どもが自分から動きだすのを焦らずに待つことが大事なのだということ、改めて感じさせられました。

年長児のBちゃんは、五月の連休明け頃から、いろいろな方法で、私の思いを確認するようになりました。毎朝、登園する時に、私が見ているのを確認してから、わざと隣のクラスの入り口（保育室内はつながっている）から保育室に入ってきて、私の目を見つめながら「〇〇先生（年中組の時の先生で、隣の

クラスを担任している）のほうが好きだから、あっちのドアから入ってきたんだよ。私も隣のクラスがよかったな」と言うのです。私は担任として少し動揺する部分もありましたが、落ち着いて見えるBちゃんが本当は初めての進級にとっても緊張していること、周囲の状況がよく見えるBちゃんが、クラスが落ち着いてきたのを確認してからそれを表現していること、Bちゃんが本心で言っているのではなく、私に答えてほしいだけなのだということ……が伝わってきましたので、「先生は、Bちゃんがオレンジ組でよかったな〜」などと私の思いを毎回伝えることにしていました。その返事を聞くと安心したように朝の身支度に向かうBちゃんとのやりとりを、三週間くらい続けたでしょうか。ある朝、仲良しの友達と一緒にバスから降りてきたBちゃんが（その頃、先生を「せんべい」と呼ぶのがはやっていた）、私のところに来て、「Bね、塩

せんべいが大好きなんだよ。だから未希せんべいも大好き。あと、オレンジ味の歯磨き粉を持つてるから、オレンジ組も好きだよ」と、思い切ったように、満開の笑顔で言ってくれました。「せんべい」「歯磨き粉」の力を借りて精いっぱい表現してくれたのが照れ屋のBちゃんらしくて、とてもうれしかったのを覚えています。

Bちゃんだけでなく、子どもはあえて傷つけるようなことを言って、相手を試してみることがあります。でも、そのようなかわりの中で、子どもたちは、いい子でない自分も丸ごと受け入れてもらえる場なのかどうかということを確認しながら、自分で安心感を獲得していつているのだと思います。

最後に、私が今回「安心」ということを考えている際にも思い出していた、倉橋惣三著『育ての心』（フレーベル館）の中の一節

がありますので、引用させていただきます。

小さき太陽

よろこびの人は、子どもらのための小さき太陽である。明るさを頒^{わか}ち、温かみを伝え、生命を力づけ、生長を育てる。見よ、その傍に立つ子どもらの顔の、熙々として輝き映ゆるを。なごやかなる生の幸福感を受け充ち溢れているを。(中略)

希^まわくは、子どもらのために小さき太陽たらんことを。

子どもたちが安心して、自分らしく生活できるとき、その傍らには共に喜びを分かち合う、[〃]小さき太陽[〃]があるのだと思います。私も、子どもたちにとって、[〃]小さき太陽[〃]となれるよう、これからも保育者として、精進していきたいと思えます。